



歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
史訪  
歴探

## その2

今話題の蛇行剣、北播にも  
播磨国風土記に関連の記述

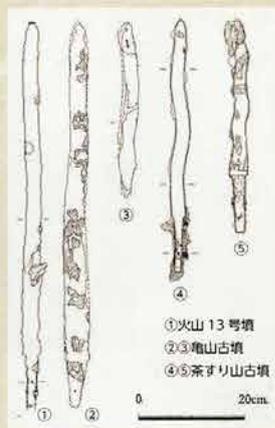
1月26日付の新聞各紙で、奈良市の富雄丸山古墳（4世紀後半）で類例のない盾形銅鏡と国内最大の蛇行剣が発見されたと大きく報道された。「国宝級の遺物」と古代史・考古研究者の多くが驚いた。私も驚いた。と同時に「蛇行剣なら播磨でも出土していたはず。『播磨国風土記』に蛇行剣と見られる話もあったはず」と思い出した。今月はこの蛇行剣に迫ってみよう。

まず蛇行剣の概略だが、名前の通り剣身が蛇のようにくねくね曲がっているために実用の武器ではなく、祭祀や儀式に使われたようだ。4世紀〜5世紀の古墳時代のものだ。私がかねてお世話になっている県立考古博物館の和田晴吾館長の「新大中トーク」（1月25日）によると、全国で85点見つかったという。

最長のものは全長85センチ（奈良県北原古墳）だったが、富雄丸山のものはそ

の倍以上の237センチもあり、しかも最古例（中期初頭）だったから研究者を驚かせたのだ。同古墳は直径109センチと日本最大の円墳で、被葬者はヤマト王権を支える大豪族と見られている。

ところで、富雄丸山は近年の詳細な計測で日本一の円墳と分かったのだが、それまで兵庫・但馬の茶すり山古墳（朝来市）も全国最大級とされていた。日本一は富雄丸山に譲ったが、茶すり山は直径91センチの大円墳だ。何とここでも蛇行剣が2本出土していたのだ。



図は県内出土の蛇行剣の実測図（中村弘さんのブログより転載）。出典は①県教委2005年「火山古墳群・火山城跡・火山遺跡」②③加西市教委2005年「玉丘古墳群」④⑤県教委2010年「史跡 茶すり山古墳」

以前から「蛇行剣を気にしていた」という考古学者、石野博信さんは、茶

すり山にも注目していた。県立考古博物館の初代館長の時代から懇意にしていたのだ。サイン付きで寄贈された著書『ひょうごの遺跡をめぐる』（2012年）所収の「蛇行剣のナゾ」の項目で茶すり山を特筆されている。まず奈良・大阪を離れた但馬地域で蛇行剣を含む大量の武器類が総計約470本も出土したことに驚き、同古墳の被葬者は「強い軍事力を持っていたと考えられる」という。なお、兵庫北部ではほかに丹波市・火山13号墳でも蛇行剣が1点出土している。

さて肝心の播磨だが、お隣・加西市の亀山古墳で2点出土している。同古墳は根日女の墓との伝承のある有名な玉丘古墳の北にある。15年ほど前、探訪したことがあるが、標高160メートルの山頂に営まれ、万願寺川流域に眺望が開け、加古川流域も見渡せた。交通の要所、軍事上の要所と思えた。

墳丘は44〜48メートルのやや楕円形の円墳だ。甲冑、刀剣、鉄鏃などの豊富な武器類の副葬からみて被葬者は武人

的性格の男性豪族と見られている。古墳の時期と言い、大きさと言い、出土遺物の構成と言い、まことに小野市の王塚古墳とよく似ている。王塚でも蛇行剣が出土してもよさそうだが、残念ながら見つかったくない。

富雄丸山の蛇行剣発見の報で、『播磨国風土記』讃容郡中川里の条にある呪いの魔剣の記事を思い浮かべたのが考古博物館・館長補佐の中村弘さん。この方も懇意にしていた。気鋭の考古研究者だ。同館HPのブログ（1月29日付）に関連記事をアップされた。それによると、この魔剣は天智天皇の時代、購入者一家を滅ぼし、土中に埋められたが、のち発見されたときも光輝いていた。発見者の犬猪が鍛冶職人に刃を焼かせたところ、蛇のように「屈伸」したそう。

中村さんは「蛇行剣をイメージしているためかもしれない」と想像する。「讃容（佐用）は鉄の産地、交通の要衝という環境からこの説話が生み出されたのでは」と推察している。



佐野允彦（さの まさひこ） 1947年、富山県生まれ。同志社大学（文化史学専攻）卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員（広報アドバイザー）を務める。

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**歴史探訪**

## その3

## 上田三四二が瀬戸内晴美の 作品の批評・解説を書いていた

く、西脇支局に転勤し、小野が持ち場になるまでほとんど知らなかった。



▲上田三四二(当時:45歳)

▼小野市立図書館の  
上田三四二コーナー

の3点だ。「夏の終わり」は瀬戸内自身の男女関係に基づく私小説だが、上田は代表作の一つとして高く評価。「かの子繚乱」は有名な漫画家、岡本一平の妻(彫刻家・岡本太郎の母親)を描いた伝記的な作品。上田はかの子の生身の女としての「性」の充足は芸術的創造の前に席を譲るように働いたとして、瀬戸内がそれを「芸術家の孤独」と見て取ったのは「伝記作家瀬戸内晴美の手柄だ」と評価している(講談社文庫版)。

主人公の「彼女たちの激しい恋愛や男出入り」は瀬戸内自身にも言えることだが、そんな作品と瀬戸内を上田は必ずしも嫌つてはいない。一方、瀬戸内も上田の批評を好意的に受け止めている(寂聴「私解説 ペン一本で生きてきた」2022年)。

2人の文学的な共通点と言えば、万葉集の相聞歌への愛好が挙げられようか。瀬戸内は高等女学校の時代から相聞歌に魅かれていたという。上田の相聞歌への造詣はひとしおで、「相聞歌

序説」という小論があるほどだ(「短歌一生」1999年)。彼は相聞歌に愛と性の原点を見出し出している。

上田の短編集「花衣」は8編とも結婚に至らない情事が主題で、講談社文芸文庫のカバーには「究極のエロスを描く連作短編集」という惹句が書かれているそう(小高賢「この一身は努めたり」2009年)。瀬戸内作品にも通じそうな表現だ。

瀬戸内は1948年から51年にかけて京都で暮らし、京大医学部付属病院小児科研究室、同図書館で勤務している。上田は1948年に京大医学部を卒業、附属病院で研修を受けた後、49年9月から医師として同病院で勤務している。ひよつとしてこの間に両者に何らかの接点があったか、のちに共通点が分かり批評・解説を引き受けることになったのかもしれない。

今年の上田の生誕100周年でもある。上田の顕彰が一段と進むのを期待したい。



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。

瀬戸内寂聴の死去(昨年11月)を契機に幾つかの作品を読んでいて、小野出身の歌人・作家の上田三四二が寂聴(晴美)の作品2、3冊の批評や解説を書いていることを知った。6月3日には上田を顕彰する小野市短歌フォーラムも開かれる。上田はどのような経緯で瀬戸内作品の解説・批評を書くに至ったのか。今月は文学史の探訪で、両者の接点、関係を探る。両氏とも故人なので敬称は省く。

まず瀬戸内だが、私は3度ばかりお目にかかったことがある。最初は朝日新聞徳島支局在勤のとき、新聞連載の『阿波おんな』が本として出版され(1972年)、その記念パーティーで。2、3度目は京都・宇治支局在勤中の1991年と92年。宇治市主催の紫式部文学賞の受賞作発表の記者会見で、選考委員として臨まれていた。

上田については私はまったく面識がな

上田は教員の家に生まれ、成績優秀で京大医学部を卒業し、医療に従事しながら、短歌・評論・小説などの文芸活動に励んだ。私には謹厳実直の人柄のように見える、若い頃の自由奔放な?瀬戸内とはどうも合わないと感じていた。それが瀬戸内の作品数点に批評を書いていたので不思議でならなかったのだ。私が上田による瀬戸内作品の批評・解説で見つけることができたのは、「いずこより」「夏の終わり」「かの子繚乱」

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
歴史探訪

## その4

## 勝手野装飾付須恵器を再考 考古博物館の特別展に合わせ

「こんな面白い須恵器があったのか！」初めて見たのは、大学時代の恩師・森浩一先生（故人）の著書『僕と歩こう全国50遺跡 考古学の旅』

のようだ」と表現された。「彫像全体が何かの場面をあらわしている」とも記された。

さて、何の場面なのかが問題なので、今回は「向かい合う男女像」についてのみ考える。当初、調査を担当した県教委の井守徳男さんは、「男女の求愛のポーズ」と考えた。ただ、女性の腕が後ろ手になっていることに注目、「相手を忌み嫌う所作」とみた。この須恵器は県立考古博物館で常設展示されているが、その展示説明も「女はいやがつているよう」としていた。

私もこれを受け「日本史上初めての夫婦げんかの人形」、または「男（首長）が女性に振られた場面」などを見ていた。風土記、万葉集などに天皇でさえ女性に振られる（逃げられる）話がいくつもあるからだ。しかしこの小像が飾られた須恵器は古墳の被葬者（首長）を追悼し、顕彰する目的のはずなのに、首長が女性に振られた場面をわざわざ飾るだろうか？と疑問を抱いた。

井守さんはその後（2009年）、巫女のような女性が首長に霊的能力を授ける場面だと考えを改められた。私は2017年12月に井守さんの講演を聴いたが、「この考えで揺るがない」と話された。

巫女説の浮上は、埴輪群の研究が進んだことに促されたと思われる。継体天皇の墓とされる今城塚古墳（高槻市）などいくつかの古墳で出土した人物や動物、家形の埴輪などの埴輪群の復元から王（首長）の生前の姿を現したと考えられるようになったのだ。

巫女と見られる今城塚の女子埴輪の姿は、勝手野6号墳の女性小像とポーズがよく似ている。古墳上に立てた埴輪群による首長の生前の姿の再現を、勝手野は高さ約55cmの須恵器壺の上で表現したのではないだろうか。

勝手野古墳群の話だけに勝手なことを述べてきたが、考古博での特別展は7月2日までで、残りわずか。ぜひこの機会に装飾付須恵器の実物をご覧になっていただきたい。

佐野允彦（さの まさひこ） 1947年、富山県生まれ。同志社大学（文化史学専攻）卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員（広報アドバイザー）を務める。

ここ20年ばかり頭から離れない考古資料が1件ある。黍田町にある勝手野古墳群の6号墳で出土した装飾付須恵器だ。過去3度ほど本コラムで紹介したことがある。いま県立考古博物館（播磨町）で開催中の春季特別展「古墳時代の技術革新」に展示されており、これを見たらまた紹介したくなつた。何度でも紹介したくなる、それほど興味深い資料なのだ。

（2000年）の写真でだった。先生もいたくこの須恵器に魅了されたようで、「人物像が円周上をめぐる回転木馬



右の写真は、勝手野6号墳出土の装飾付須恵器（一部）＝県立考古博物館で、上の図は須恵器に付けられた人物小像の概略図（一部）＝好古館図録から転載。



大人情に魅了された

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**歴史探訪**

その5

## 天下分け目、どうする？ 直盛 NHKの大河ドラマに寄せて

7月5日、居城の黒田城を出て木曾路を経て16日、上野国の高崎城で家康の側近、井伊直政に家康支持を表明した。好古館の粕谷修一副館長によれば、



写真右は、木曾川先陣の一柳直盛の活躍ぶりを描いた「関ヶ原合戦絵巻」。上は、直盛らに出した家康の書状(いずれも好古館提供)

いま放送中のNHK大河ドラマは、「どうする家康」だ。徳川幕府を開いた家康の生涯を描く。8月は本能寺の変その後だろうか。小野藩一柳家の祖先で家康に一番縁があったのは、監物直盛(1564〜1636)と思われる。今月は大河ドラマにあやかり直盛と家康のつながりを探る。

直盛は豊臣秀吉の直臣で、関ヶ原合戦(1600年)前後は尾張の黒田城主(一宮市)として3万5千石を領していた。秀吉没後(1598年8月)、豊臣政権が石田三成派と家康派に分裂すると、家康派に傾いていく。私はかつて「恐らく関白秀次切腹事件に連座した一族がいて、秀次を自殺に追いやった二成に反感を抱いたのだろう」との私見を述べた。

慶長5年(1600年)6月16日、家康が反対派の会津の上杉家征討に大坂城を進発する。どうする？ 直盛。

家康からの参陣要請を受けてのことではなく、自主的な行動だったようだ。一柳家の史料によると、家康から感謝され、「貞宗の脇指」を贈られたという。ふつう福島正則ら豊臣方の武将が

家康に加担すると表明したのは、会津攻めの途中、いわゆる「小山評定」(7月25日、栃木県)でのこととされる。だが、直盛はいち早く家康支持を表明していたのだ。

直盛がいち早く家康支持を表明したことが「天下分け目」の功績の一つとされた。さらにもう一つの功績、「関ヶ原合戦」(決戦は9月15日)の木曾川先陣の戦功と合わせ、家康からじかに「比類なき手柄」と激賞されることになる。

これは関ヶ原決戦前の重要な前哨戦なので少し説明する。8月21日、木曾川の渡河戦についての軍議では上流の先陣が池田輝政、下流の先陣は福島正則と決まった。しかし、直前の軍議で直盛は自分の居城近くの渡河先陣を他の大名が行うことに不満を示し、

自分が務めるべきと主張する。一悶着のあと、山内一豊らのとりなしで池田の家老が最初に渡り、その後を直盛、続いて輝政が渡る折衷案で決着。渡河と渡河後の合戦(「米野合戦」1122日)

で直盛、輝政らは奮戦した。

続いて直盛は、西軍の重要な拠点である大垣城をにらむ長松城(大垣市)の守備を任せられ、しっかりとその責務を果たす。9月14日、家康が勝山に着陣したとき、じかに目通りが許され、先述の通り「比類無き手柄」と賞された。直盛は関ヶ原本戦には加わっていないものの、決戦勝利に至るさまざま局面での活躍が讃えられた。家康は関ヶ原後、大坂に帰陣する行軍の先手の一番を福島、一番を直盛に命じている。功績を讃えてのことである。

実は戦功として家康から伯耆一國を賜る内意があったという。どうする？ 直盛。大変な恩賞なのだが、直盛は西軍について親族の助命を嘆願する代わりに伯耆の国は放棄した(シヤレです)と一柳家の史料に伝わる。

本コラムは粕谷さんに協力いただいたが、特に「家康と播磨の藩主」(播磨学研究所編)所収の粕谷さんの論文を参考にした。お礼申し上げます。



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。

# 歴史探訪

その6

## 忍者を捕えた どうする直盛 続・NHK大河ドラマに寄せて

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの

一柳家臣「殿、敵方の忍者を捕えま  
したぞ」。直盛「でかした。みせしめに  
獄門にいたせ」

慶長5(1600)年9月上旬、一柳  
直盛が守備する美濃・長松城(大垣  
市)の陣中では、一柳主従の間でこん  
なやりとりがあったに違いない。

前月はNHKの大河ドラマ「どうす  
る家康」にちなみ、徳川家康と小野藩  
一柳家のご先祖、監物直盛の関係を関  
ヶ原合戦の前哨戦の一つ、木曾川渡河  
戦(8月22日)を中心に探った。長松城  
での忍者捕縛はその10日ほど後のこと  
と見られる。

このことは前回の取材で好古館の  
粕谷修一副館長に教えていただいた。  
ネタ本はテレビで人気の歴史家、磯田  
道史氏の近著「日本史を暴く」(中公  
新書)という。今月は粕谷さんの教示  
と磯田氏著作に助けられ、直盛の忍者  
捕縛に迫る。

木曾川先陣の軍功の後、直盛に長  
松城の守備という大役が任された。長  
松城は石田三成方の拠点の一つ、大垣  
城の西にあり、同城の情勢をうかがい



写真右は、長松城での忍者捕縛を記した「一柳家記」(一部)国立国会図書館デジタルコレクション、写真上は直盛が守備した大垣市の長松城跡(好古館提供)

つつ、もう一つの石田方の拠点、近江・  
佐和山城との連絡を絶つという重要  
な責務があった。家康側近の井伊直政、

本多忠勝が他の諸大名を抑えて直盛  
を推挙したという。

まず磯田氏の著作中の「潜入失敗、  
忍者もつらいよ」に従って概略を記す。  
この記述は一柳家が幕府に提出した  
公式記録「一柳家記」に拠っている。

一柳家は長松城より3町(約330  
疋)大垣寄りに張番3カ所を構え、足  
軽頭1人、足軽10人ずつを配置して警  
戒線を張った。石田方は斥候(忍者)8  
人を餅売りの百姓に変装させ、忍び込  
ませた。しかし、一柳たちはたちまち  
見破り、捕縛し、張番所に獄門に懸け、  
見せしめとした。

次に原と名乗る牢人(うらびん)が張番所に来  
て仕官を願いだした。それを長松城の視  
察に来た池田輝政らが怪しみ、「忍之  
者」と見破り、捕縛し、井伊直政の陣  
に連行。井伊は「二段手柄」とほめた  
うえ、斬殺を命じた。

さらに、一柳家は「大柿(垣)忍之  
者」を2人捕縛、「斬捨」たという。

これを率直に読むと、一柳家が2回、  
池田家が1回、長松城で計3回忍者を

捕縛・斬殺していることになる。石田  
方は多少の犠牲を出しても長松城に  
潜入してよほど東軍の情報を欲しかっ  
たようだ。3度も失敗するとは石田方  
の忍者は忍びの術が未熟だったのか、  
一柳家の防衛が優れていたのか。

私の史料読解力が弱いせいなのか、一柳  
家側の史料には池田家捕縛が記されず、  
一柳家の活躍のみ書いたもの、一柳・池  
田両家の共同戦線としたものがあると  
読み取れる。幕府に提出した「一柳家  
記」が池田の活躍をもっとも詳述してい  
るのは、輝政が家康の婿であるから、大  
いに花を持たせたのであろう。

その代わり身内に伝える一柳家側  
の史料には、「ご先祖・直盛の活躍の特  
筆したのであろう。家康が直盛の戦功  
として木曾川先陣の功などを激賞し  
たことは前月、すでに書いた。これだけ  
でなく、この長松城の守備についても  
手柄を称えており、一柳家の各種由緒  
書はこれを繰り返し書き残している。  
「ご先祖の推し」なのだろう。



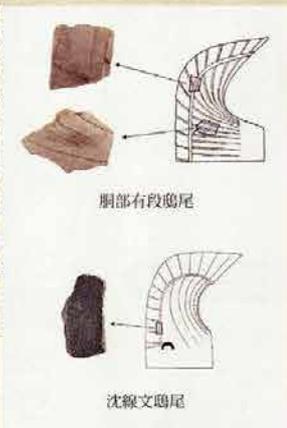
佐野允彦(さの まさひこ)：1947年、  
富山県生まれ。同志社大学(文化史学専  
攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間  
勤務。2010年から2023年3月まで  
小野市学術政策員(広報ア  
ドバイザー)を務める。

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**史訪**  
**歴探**

その7

## 河合廃寺跡出土の鴟尾 県内最古の資料だった

たものだった。出土数の多さなどから瓦を主とした展示になったが、そのおりの遺物精査中に河合廃寺跡の鴟尾に注目した。



写真右は、出土の鴟尾片とイメージ図=好古館提供。写真上は、堂の基壇(一部)とみられる盛土が残る河合廃寺跡。

河合廃寺で用いられた胴部有段鴟尾(後述)が県内最古であることは、すでに一部の研究者によって指摘されてい

たが、山本さんは現物でそれを確認しただけでなく、のちに胴部有段を簡略してつくられた「沈線文鴟尾」も初めて確認したのだ。

またまた難しい言葉が出てきて恐縮だが、前者は文字通り鴟尾の胴部に段違いの面を持つもの、後者は段を省略し、ヘラ描きで線を彫って表現したものだ。これまでの鴟尾の研究で胴部有段から15年〜20年ほどあとに沈線文鴟尾がつくられはじめたとみられている。

おそらく寺院建立が増えたため、鴟尾の需要も増大し、丁寧に胴部有段を作ることが難しくなり、言わば手抜きの手線文で、間に合わせたのだろう。これらの鴟尾の産地は明石市の高丘窯跡とされており、高丘窯跡から河合廃寺にもたらされたものと指摘する。

山本さんは河合廃寺の胴部有段鴟尾を同寺の創建期のものとし、年代は7世紀第3四半期(650年ごろ)〜675年(ごろ)とみている。さらに二つ

の寺院跡で胴部有段と沈線文の2種類の鴟尾が見つかったのは全国でも河合廃寺が唯一と強調する。となると、古代寺院の鴟尾の生産・供給体制を考える上で貴重な資料となる。あわせて古代の小野エリアの重要性が一段と高まる。

以上の話だけでもすごい「発見(確認)」だが、山本さんの考究はさらに飛躍する。同廃寺近くの字名「小堀」に注目。古代の「評・郡(こほり)」という行政単位の遺称地と見て、古代賀茂郡衙があり、河合廃寺とも密接な関係があったのではと推察している。興味を持たれた方は山本さんの論文「小野市河合廃寺の表採資料と周辺環境」(『ひょうご考古』第19号)をお読みください。

今回の話は考古学の中でもややマイナーなテーマなので、市民の皆さんには難しかったかもしれませんが、私も書くのに苦労した。首尾(鴟尾)よくお読みいただけたでしょうか。



佐野允彦(さの まさひこ)……1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。

この夏、小野市内の古代寺院ゆかりの考古資料が話題になった。河合中町にある河合廃寺跡で出土していた「鴟尾」片2点が県内最古のものとわかったのだ。新聞でも報道された。市立好古館の学芸員、山本原也さんが「確認」した。この遺物が同館で展示されている今、山本さんに話を聞いた。

まず皆さんには聞きなれない言葉かもしれない「鴟尾」について同館提供の資料などに基づき、簡単に説明する。宮殿や仏殿の屋根の両端に取り付けられた飾り瓦の一種。形は鳶の尾、鳥の羽根のように見える。中国が発祥地で朝鮮半島の百濟から伝来し、国内最古の鴟尾は奈良県明日香村の飛鳥寺跡(6世紀末ごろ)とされている。

山本さんの「確認」のきっかけは、昨年春、夏開催の企画展「小野市の古代寺院」だった。河合廃寺、新部大寺廃寺、広渡廃寺の3寺院に焦点を当て

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
史訪  
歴探

## その8

## 緊急報告

## 先祖(?)、佐野源左衛門の 墓が姫路市内にあった!

明する。鎌倉幕府の5代執権、北条時頼の廻国伝説に登場する落ちぶれ御家人だ。

時頼が旅の僧に身をやつし、諸国行



写真上は、姫路市野里にある伝 佐野源左衛門の墓(埴岡真弓さん提供)。写真左は、高岡御車山祭 御馬出町の曳山に鎮座する佐野源左衛門の人形(富山県高岡市)

私の先祖と自称している鎌倉幕府の御家人、佐野源左衛門の墓が姫路にあるという情報を得た。これは見逃せない。今回は源左衛門にまつわる話を「緊急報告」する。「小野と何の関係があるんや」と言わずに、まずは最後までお読みのほどを。

緊急報告としたのは、9月13日に姫路城そばの県立歴史博物館で播磨学研究所の埴岡真弓さんが「佐野源左衛門の墓―鉢の木―異聞」と題し講演された話をもとにしているからだ。県芸術文化協会主催、ふるさとの歴史講座(姫路校)「播磨史探訪」の二コマだった。埴岡さんはかねて懇意の方だったので、私の郷里、富山県高岡市の源左衛門伝説についても聞いてもらえば、と駆け付けたのだ。

まずは佐野源左衛門のことだ。播磨の人、とくに若い人にはさっぱりわからない人物だろう。ごくかいつまんで説

脚の途次、冬の夜、雪に見舞われ、源左衛門のあばら家に宿を乞う。一族に所領を奪われ、赤貧の身の源左衛門だが、せめて温まってもらおうと梅、松、桜の

盆栽を切り、囲炉裏にくべる。そして

「今はこのように落ちぶれているが、『いざ鎌倉』と号令がかかれば、やせ馬にまがり、鎌倉へはせ参じる所存」と語る。

後日、御家人に召集の号令がかかり、源左衛門も鎌倉に駆け付ける。そこに旅の僧ならぬ前執権・時頼が現れ、「源左衛門、よく参った。忠誠心はしかとわかった。恩賞に梅、松、桜にちなむ所領3か所を与える」と告げた。

鎌倉時代の武家社会の御恩と奉公の関係がよくわかる話のせいか、古くから伝説化し、諸国に広がった。室町時代には謡曲「鉢の木」として成立し、人気の演目になった。戦前の教科書にも載っていた。

講座で埴岡さんは姫路を含む播磨国は執権、北条氏と縁が深いこと、時頼ゆかりの地が播磨にあること、謡曲「鉢の木」のことなどを紹介された上で、姫路市内に源左衛門の墓と伝えられる墓所があることを映像も披露されるながら丁寧に話された。この墓所の周辺には佐野家が複数あるそうだ。源

左衛門のことはいささか知っていたつもりだったが、姫路の墓については初耳で、興味深く拝聴した。

最後に私が登壇し、開口一番、「私は何を隠そう佐野源左衛門の子孫です」と切り出した。受講者からは疑問しそうな視線が突きささる。ここで高岡御車山祭のパンフを取り出し、「私の実家のある御馬出町の曳山に鎮座する人形が源左衛門で、本座(祭神)として祭られているんですよ」と説明すると、受講生の間で「ほー」とか「へー」とかの言葉が漏れた。

佐野源左衛門は源義経や楠木正成ほどではないが、それなりに有名だった。全国に蟠踞する佐野氏の中には、源左衛門をわが先祖と仰ぐ家があちこちに出たのではなからうか。

さて、「佐野」の旧名は「狭野」で、「播磨国風土記」に狭野が出てくる。佐野も小野も狭い土地というほどの同義語だ。ここでやっと佐野と小野が結びついた。やれやれ。



ドバイザーを務める。

佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報)

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
歴史探訪

その9

## 播磨の史料に源左衛門の名 — 続・佐野源左衛門の墓

五、六年生の頃、カブスカウトのイベントで謡曲「鉢の木」をもとに源左衛門の劇をした。脚本・演出・主演はもちろん私。中学生の時は我が家が町内



写真右は「佐野源左衛門」の名が記された魚住文書の史料(一部)。「兵庫県史・史料編中世II」より転載。  
上は、佐用町・最明寺にある北条時頼坐像(佐用町観光協会提供)

歴史探訪 佐野允彦の歴史探訪 第9巻  
佐野源左衛門の墓  
佐野允彦著  
発行所 佐野源左衛門の墓  
発行年 2023年  
発行部数 100部  
定価 1,500円(税別)  
ISBN 978-4-909888-00-0

明寺鉦泉もあるなど源左衛門と越中との縁は深い。鎌倉時代の越中の守護が北条氏の一族、名越氏であったこと、北条氏の認可を得た「過所船」が日本海を航行し、越中の港にも立ち寄ったことなどが背景になり、時頼と源左衛門の伝説が越中に流布したのではないかと推察している。

さて、いよいよ播磨に関わる話だ。ここまで書いてきて、10年ほど前、播磨の守護大名、赤松氏関係の講演会が出たレジュメに佐野源左衛門の名前があったことを思い出した。そのときは飛び上がるほど驚いた。実在の源左衛門がいたと。時代が約200年も違うから既述の源左衛門とは別人だが。

そのレジュメを探して史料を、再発見。「兵庫県史・史料編中世II」でも文面を確認した。文明12年(1480

年)9月5日赤松氏奉行人連署奉書だ。前号でもお世話になった埴岡真弓さんによると、姫路の広峯社の「参銭・諸公事物等」を北播磨の土豪、在田氏が「押領」したのを代官職の佐野源左

衛門が在田氏の違乱を退け、返還したというのがその文面の骨子だ。詳細は省くが、赤松氏惣領家と一門衆在田氏の抗争の中で一定の活躍をした佐野源左衛門がいたということだ。

ちなみに赤松一族衆の中に佐野氏もいた。嘉吉の乱(1441年)後、書写・坂本城に拠った赤松満祐のもとに参集した赤松一族88人の中に佐野氏の名がある。

播磨中世史の研究者、依藤保さん(加東市)からほかに佐野氏が記された史料を6点ほど教えていただいた。その史料に「佐野幸國(源左衛門尉)」という人物もいた。京都の祇園社、姫路の廣峯社と関わりがあった。前出の源左衛門との関係はよく分からないが、我が家の屋号「佐野幸」と合わせ、誠に興味深い。

またまた紙幅が尽きた。廻国伝説にちなんで佐用町・最明寺に時頼坐像(国の重要文化財)がまつられていることを紹介して筆をおく。

まず高岡関係で書き残したことから。国の重要文化財に指定されている「高岡御車山祭」で私の実家のある御馬出町の曳山に本座(祭神)として源左衛門の人形が飾られる。私は小学校六年生まで毎年その曳山に乗り、源左衛門の従者よろしくそばに陣取っていた。この祭にはわらべ歌があった。「御馬出の山のうえに佐野の源左衛門空むいてみやれ であかい弓矢 いくさの時の姿じゃないか(以下略)」。子供の頃、よく歌った。

の山宿になり、座敷に飾られた源左衛門人形のそばで一晩お守りした。

高岡には佐野という地区があり、そこに源左衛門の子孫を名乗る佐野家がある。高岡の郊外に時頼ゆかりの西



ドバイザーを務める。

佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
史訪  
歴探

その10

「加賀百万石」の祖、前田利家は  
戦国大名(一)の算盤名人だった

論で「豊臣政権論」を書くとき、大いに世話になった。あれから50余年、本欄のコラムで再びお世話になるとは実に感慨深い。

記す。秀吉の朝鮮出兵(文禄の役II 1592年)で肥前・名護屋城に滞陣中でも算盤を手に使っていたというのは、知る人ぞ知るエピソードだ。

この算盤は前田育徳会・尊経閣文庫(東京)が所蔵する。サイズは横13寸、縦6・9寸で、上が2玉、下が5玉。材質は杵が黒檀で、象牙の線筋をはめた、中国式の算盤という。

この算盤、長い間、現存品では日本最古とされてきた。だが2014年、雲州堂(大阪市)所蔵の「四兵衛重勝拝領算盤」が1591年作のものとなり、それが日本最古となった。重勝は黒田官兵衛の家臣なので、播磨と縁があるのはうれしいことだ。

続けて岩沢は「(利家は)経済観念が発達していたから、領国の支配が円滑で、経済的に恵まれていたのは当然である」とした上で、遺品には巨額の金銀財があったという。

さらに単なる利殖家ではなく、多くの大名に金子を融通していたと記す。この中に「柳家も含まれていたかもしれ

ない(未確認)。自らの死期を自覚したとき、嫡子・利長に伊達政宗、細川忠興ら7、8人の金子借用状を譲り、「自分の死後味方になった者には、この責務を免除せよ。一層味方を募ることができよう」と伝えた話を紹介している。

算盤と言え、加賀藩の「御算用者」(会計・経理の役人)を描いた磯田道史『武士の家計簿』が思い起こされる。ベストセラーになり、2010年に映画化もされた。その役所は「御算用場」と呼ばれ、江戸後期には約150人も御算用者がいた。「前田家は利家・利長の時代から算勘にたけた家風」であった(磯田同書)。

映画で使われていた算盤は、播州算盤工芸品協同組合が提供したことは皆さん、ご記憶にあるだろう。やれやれやと小野に繋がり、帳尻があった。パチパチ。ちなみにわがふるさと富山県高岡市は越中の国だが、江戸時代は加賀藩領だったので、利家・利長父子には愛着がある。

佐野允彦(さの まさひこ)……1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。



ドバイザー)を務める。

皆さま、新年おめでとございます。年が明けたので旧聞になってしまっただが、大河ドラマ「どうする家康」で昨秋、前田利家(役・宅麻伸)が数回登場したのはお気づきでしたか。天下人・豊臣秀吉の晩年、一段上座に座る秀吉の目の前、最前列の左右に利家と家康が居並ぶ場面が二、二回あった。利家は豊臣政権の五大老の一人で、家康と肩を並べる重鎮だった。

「利家と小野と何の関係があるのか」と皆さん、焦らないでほしい。若いころから武勇に優れ、加賀百万石の祖となつた利家は、実は戦国大名中有数の算盤の名人だったのだ。前田家は一柳家とも少なからぬ縁がある。そのつながりで今回は算盤名人、利家を紹介する。

本稿では主に岩沢憲彦「前田利家」(1966年、吉川弘文館)を参考にし、私事で恐縮だが、同書は大学の卒



▲小野を代表する特産品、播州そろばん(小野市伝統産業会館)

算盤上手だった前田利家像(金沢市)▶

それはさておき、同書は「彼(利家)は、数理に明るかった」「兵員の計算や金・銀・米穀等の算用に算盤を用いた」「常に具足櫃に入れてあったという」と

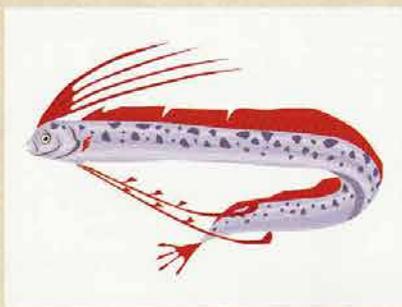
歴史探訪  
佐野允彦の  
はりま・おの

その11

緊急報告

「竜宮の使い」は能登地震で騒い  
だか——辰年早々の災害を巡って

この2帝のくだりは主に保立道久『歴史のなかの大地動乱』（岩波新書）に拠ったが、保立氏によると平安時代から鎌倉時代にかけて「龍は雷電・地



イラスト(上)は、その出現が地震の予知と信じられたリュウグウノツカイ。写真(左)は、貞観10年の播磨地震を記述した「日本三大実録」(国文学研究資料館・国書データベースより)

会には広峰神社の祭神、牛頭天王を迎えたが、これは山崎断層が震源となつた播磨地震の地震波が摂津を経て山城国まで走り、京都群発地震を招いたことを表しているというのだ。山崎断層は小野市域も通っており、看過できない見解だ。

回り道をすぎたが、表題の「竜宮の使い」とは、日本海などの深海に棲む怪魚「リュウグウノツカイ」のことだ。絵のように細長い魚体(3メートル)で、赤い背びれが特徴。人魚のモデルの一つになっている。富山湾、能登半島など

日本海側での捕獲が多い。兵庫県ではたしか但馬での捕獲例があったはずだ。なぜこの魚に言及するかというと、

人魚などと同じように地震・津波を予知する予言獣と信じられていたからだ。コロナ禍でアマビエが疫病、厄災を

除くと脚光を浴びたが、龍神の使いという「神社姫」なども含めふだん見慣れぬ怪しいものの出現を天変地異の予兆と見た時代があった。

思うに龍(龍神)は大自然の象徴で、

人間が敬い、あがめれば幸いをもたらす、傲慢に扱えば災いをもたらすのではない。産業革命以降、自然環境を破壊してきた人間の所為で龍神が今しつぱ返しをしているのではない。世界各地で頻発する天変地異を見ているとそう感じる。

リュウグウノツカイと地震の関連性については近年科学的な検証で「誤りで、迷信だ」とされた。さて、能登地震でリュウグウノツカイは騒いだのだろうか。1月18日の時点で死亡者は230人を超えた。痛ましい限りだ。ご冥福と1日も早い復旧、復興を祈る。被災者が災害を乗り越えて昇竜のように飛翔されることを願う。

小野市は被災者のための義援金を募っている。市民の皆さまのご協力をお願いしたい。

私事で恐縮だが、私の実家は能登半島の付け根に近い富山県高岡市で、国の登録文化財である土蔵造り住宅が土蔵の壁の崩落などの被害を受けた。

佐野允彦(さのまさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。



ドバイザー)を務める。

本欄は年始めにその年の干支にちなむ話題を書いてきた。今年も辰(龍)が、元日早々能登半島で震度7の大地震が発生、甚大な被害が出た。阪神・淡路大震災を経験した私たちの中に「能登の地震と兵庫は関係ないだろう」という方はまずいないはず。少しお付き合い願いたい。

天皇・皇后両陛下も心痛され、新年の一般参賀を中止された。宮中一殿で国家、国民の安寧を全身全霊で祈願されたはずだ。平安前期の文徳天皇(在位850~858年)、次の清和天皇(在位858~876年)の治世は地震などの天災が相次いだ。両帝は度々厄災退散を神仏に祈願した。ことに清和帝は御霊会、大祓を催すなど朝廷挙げて祈願し、救援策も行った。しかも国民を罹災させたのは「責め、深く予にあり」と自らを責めた。

震・噴火の中枢に位置するオールマイティの存在になつていった」と指摘。

この貞観11(869)年の祇園御霊会と前年の播磨地震、姫路・広峰神社と関係づけた洞察までしている。御霊

十三日甲辰地震、十五日丙午播磨地震、本月八日地震、動搖甚巨、合議定案、幸甚幸甚、御霊、十六日丁未地震、廿一日壬子地震、廿七日戊午、教伊豆国正四位下三嶋、神從三位上

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
歴史探訪

## その12

## 小野史の宝、重源・浄土寺・大部荘 市文化財保存活用地域計画に寄せて

ここで私の愚案だが、以前大部荘のことを取材したときに荘域のどこにも「大部荘跡」という説明板がなかった。日本史上の数ある荘園の中で大部荘はベスト5に入る超有名な荘園と評価するが、しかるべき個所に真っ先に説明板を立ててほしい。具体的な事業の中の「統一サインの整備」に入っていると思うが。

この計画は2024年度から10カ年計画で始動する。「考古学は地域に勇気を与える」というのは私の恩師である考古学者、故・森浩一先生（同志社大学名誉教授）の至言だ。私はこれをもじって「文化財は地域を元気にする」と言ったり書いたりしてきた。「小野市文化財保存活用地域計画」はまさに小野市と市民に勇気と元気を与えるものと言える。市民の皆さまにはせめて計画の概要版だけでも読んでいただきたい。さらに3月9日にコミセンおおべで開かれる記念講演会も聴講いただければうれしく思います。

佐野允彦（さの まさひこ）：1947年、富山県生まれ。同志社大学（文化史学専攻）卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員（広報アドバイザー）を務める。

小野の歴史における重源上人の存在だ。小野の歴史上の人物、出来事で全国的に最も知られているのは、重源による国宝・浄土寺の創建（1197年）



小野市文化財保存活用地域計画

写真右は、浄土寺蔵の重源上人坐像（好古館提供）下は浄土寺周辺の文化財（「小野市文化財保存活用地域計画」より）



小野市教委・好古館が3年がかりで策定に取り組んでいた「小野市文化財保存活用地域計画」が昨年末、文化庁の認定を受けた。「小野の歴史文化を暮らしに活かし、未来につなぐ」計画だ。ふだんこの歴史コラムに協力いただいているからお世辞を言うわけではないが、まことに優れた計画書だ。この「広報おの」3月号も同計画の概略を「特集2 文化財を未来へ」で記述しているが、私も私なりの視点で読み解き、紹介したい。

まず私事で恐縮だが、計画書の第3章「これまでの取組み」の中に、「広報アドバイザーによる連載」として本広報誌への私のコラム連載のことが記載されている。ありがたいことだ。13年間にわたり150回以上連載を続けた甲斐があった。この計画書は我が家の家宝としたい。

さて、「私なりの視点」というのは、

と大部荘開発だろう。これ以外で小野のことが学校の教科書に載る歴史事象はないはずだ。申し訳ないが、私自身、北播磨に転勤で赴任するまで浄土寺、大部荘のこと以外小野のことは知

らなかった。

小野の歴史での一押しが重源とその実績であることは間違いないだろう。計画書中の第4章「小野市の歴史文化の特徴」を読んでもそう思う。ちなみに第4章は小野の歴史文化の概説で、19頁。わずかに数分で小野の通史がわかる優れモノだ。

以上のことからしても当然だろうが、計画書概要版は「大部荘開発と浄土寺」を「計画期間内に優先的に取り組むテーマ」と赤字で特筆している。

そして、第7章「歴史文化の強みを活かした戦略的・重点的な取組み」では、「関連文化財群の設定」を掲げ、「大部荘開発と浄土寺」を一番に挙げている。その柱は、「俊乗坊重源が残した来迎の世界」、「大部荘の開発」など六つの要素と分解している。諸手を挙げて賛同したい。

さらに、関連文化財群の措置として「学ぶ」「守る」「活かす」など五つの方針を掲げ、18項目に及ぶ具体的な事業名を示している。

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**歴史探訪**

その13

文化財計画に  
寄せて・続編

## 重源、自ら「南無阿弥陀仏」と名乗る — 熱烈な信仰か、不遜な思いか？ —

への熱烈な信仰のあまり阿弥陀仏と一体になりたかったのか？

梅原は前述の一文に続けて大意、こう話した。「重源は地獄に落ちて閻



写真右は、観阿弥陀仏の墓とされる石塔(浄谷町)、上は浄土寺出土の南無阿弥陀仏銘の瓦(いずれも好古館提供)

3月号の本コラムで「小野市文化財保存活用地域計画」の策定に寄せて、超目玉事業としている重源による「大部荘開発と浄土寺」の骨子を紹介した。ただ、重源の事績については本連載で数回紹介しており、重複感があるので、あえて言及しなかった。しかし、ある私的な動機から昨秋、在来仏教(主に浄土真宗)の本を読んでいて「重源は自ら南無阿弥陀仏と名乗った」という話が気に掛かっていた。今月はこの話を探りたい。

本稿執筆の直接のきっかけは、作家五木寛之の「仏の発見」(2011年)だった。有名な哲学者、梅原猛との対談集で、梅原は「最初に南無阿弥陀仏と名乗ったのは、東大寺の再建の功績をたてた重源です」と明言している。私の頭はこの一文にざわついた。自ら仏を名乗るとはいくら高僧と言えど不遜ではないのか、それとも阿弥陀仏

への熱烈な信仰のあまり阿弥陀仏と一体になりたかったのか？

梅原は前述の一文に続けて大意、こう話した。「重源は地獄に落ちて閻

ひとまず大家の言葉に従っておく。ただ、続けた話で「この重源に倣って多くの念仏の僧が阿弥号を名乗った」というのは不正確だ。重源がまず阿弥号を名乗り、その後自分の弟子をはじめとする僧侶、仏師、職人らに阿弥号を授けて名乗らせたというのが正しい。

このことは図録「大勸進 重源」(奈良国立博物館編集、2006年)に明記されている。それによると、「重源が弟子たちに阿弥陀仏の名を付したのは、寿永二(一一八二年)から」とした上で、東大寺再建のための勸進活動を推進するために、僧侶、技術者たちに阿弥号を与えて組織化したことに特色があると指摘している。

その代表格と言えるのが、浄土寺の一代目と言える観阿弥陀仏であり、仏師快慶だ。前者の墓は浄土寺近くに土盛・石塔が残る(市指定文化財)。快慶は言うまでもなく浄土堂の本尊、国宝・阿弥陀「尊立像の作者であり、「阿弥陀仏」と名乗っている。

以上のようなことからしても重源が

自ら阿弥号を名乗り、関係者にも阿弥号を授けたのは熱烈な阿弥陀信仰に基づくものと理解される。そもそも浄土寺は「南無阿弥陀仏寺」とも呼ばれていた。その伽藍配置と阿弥陀「尊立像は、極楽の世界を「可視化」したものだろう。小野の人々はこの世に出現した浄土に喜び、信仰を深めたに違いない。

この点も市の文化財保存活用地域計画は「俊乗坊重源が残した来迎の「世界」の項目を掲げ(第7章)、抜かりがない。「夕刻になると、西側の池に反射した夕日が阿弥陀「尊立像の背後から差し込み、極楽浄土の世界を表している」(骨子)と。

阿弥号は後世、芸能者や技能者の名前に受け継がれる。室町時代の能の大成者である観阿弥、世阿弥父子が有名だ。拙宅近くの神戸市東灘区内で「五阿弥」さんという表札を見つけた。阿弥号はいまも生きています。「アミーゴ」(スペイン語で友人、味方)。



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

歴史探訪  
佐野允彦の  
はりま・おの

その14

大河ドラマ「光る君へ」に  
寄せて

紫式部の父、藤原為時は若き日、  
姫路にあった播磨国庁で勤務した

国の権少掾に任命されたのは、安和元(968)年11月。22歳ころ(諸説あり)のことだ。これは『類聚符宣抄』という奈良・平安時代の官符・宣旨を編纂し



写真右は、藤原為時の播磨権少掾任命を記録した『類聚符宣抄』(国文学研究資料館・国書データベースより)、上は播磨国庁跡とされる播磨国総社(姫路市総社本町)

権大納言藤原朝臣伊弉宜兼 勳播磨  
権少掾藤原為時任所礼持本位放逐且  
全請所者  
安和元年五月七日外記本藏内奉

課長・係長クラスだろう。

では、任命されたのは確かだが、播磨に赴任したのかどうか? というのは当時、国司に任命されても任国に赴任しない例(「遥任」という)が増えていたからだ。為時が着任したことを示す記録は不詳だ。しかし、のち(996年)越前の国司に任命された時は紫式部らを伴い、ほぼ家族ぐるみで転勤しており、播磨へも実際に赴任したと思われる。

王朝文学に詳しい国文学者、今井源衛はその著『紫式部』(吉川弘文館)で「973年前後まで播磨で勤務したであろうか」(大意)と記している。ただし、その根拠は明示していない。当時の国司の任期は4〜6年なので、妥当な見解だろう。

さて厄介なのは式部の誕生年で、今井は天禄元(970)年生まれとし、「為時は播磨権少掾の職務に従っていた」と書いている。これを素直に読めば式部は播磨生まれとなる。ほんまかいな? ただ、式部の生年については諸説

あり(970年から978年までの間)、今井説は確定的ではなさそうだ。式部が播磨生まれだったなら今頃播磨は大フィーバーだろうに…。

では為時はどこで勤務していたか。平安時代の播磨国衙(国司らが勤務した役所群)は姫路城の東側、播磨国総社一带にあったのは発掘調査で明らかになっている(「本町遺跡」)。為時はその中の国庁(国司が政務や儀式を行う政庁)で勤務した。大学寮の文章生出身という経歴と文才から勘案すると、国守のもとで文書課長・係長のような仕事をしていただろうか。式部の父が姫路で筆を振っていたと想像するとまことに興味深い。

長々書いてきたが、小野との関係はどうなのか。小野を含む賀茂郡の行政にも何らかの形で関与していたであろう。国守は毎年、国内を巡察するから、為時も同行して賀茂郡も訪れていたであろう。無茶ぶりだが、何とか小野と結びついた。やれやれ。

佐野允彦(さの まさひこ)：1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで

小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。



「紫式部の父が播磨勤務だったって!?」。NHKの大河ドラマ「光る君へ」を見ていて驚いた。3回目の放送だった。紫式部がある貴族邸での姫君らの集いで、「父は前の播磨権少掾」と自己紹介したのだ。初耳だった。ほんまかいな? 取りあえずネットで検索してみた。玉石混交の情報の中には式部は播磨で生まれたとするものまであった。今月はこの父娘と播磨の関係の謎に迫りたい。

式部の父は藤原為時。昨今、大河ドラマに便乗して出回るムック誌などには下流貴族と位置付けているものがあるが、これは間違い。傍流だが、名門・藤原北家の流れを汲み、祖父は中納言、自身も正五位下・越後守に就いており、中流貴族である。和歌や漢詩の才で知られていたが、朝廷の役人としては出世に恵まれなかった。その為時がドラマにあるように播磨

た記録集に辞令があるので、確かだ。律令制度での国司には守、介、掾、目の4等官があり、少掾は上から6番目ぐらい。しかも少掾の権(副官)だから、国庁(いまの県庁)の上級官職でなく、

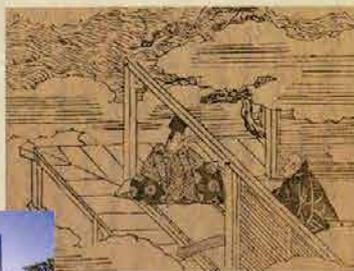
歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**史訪**  
**歴探**

## その15

大河ドラマ  
「光る君へ」に  
寄せて(続)

平安中〜後期の播磨国守は  
中・下流貴族には垂涎の官職

新書)によると、「五位と六位の間が管理職とヒラの境目のようなもの」だが、貴族の女性たちは五位でさえも軽視していたという。その一人はなんと紫



▲「源氏物語」に描かれた明石入道の屋敷での入道と光源氏の対面の場面(国立国会図書館デジタルコレクションより)

明石入道の屋敷跡と目されている明石市の善照寺(一社) 明石観光協会提供▼



流貴族が願ったのは諸国の国守のポストだ。身分はそれほど高くなくとも、権限と収入が抜群だったからだ。というのは、平安中期になると律令制が崩れ始め、地方からの税収が滞るようになり、朝廷は国守が一定の税さえ上納すればそれ以上の課税などで私腹をこやすことを黙認したからだ。

任国に赴任して徴税権を最大限に活用した国守を「受領」と呼んだ。当時、諸国は大国、上国、中国、下国の4段階にランク付けされていて、大国、上国の受領は喉から手が出るほど欲しい官職だった。中でも大国・播磨は国力が豊かで、人気が上位だった。『小野市史第一巻』によると、摂関期の播磨守は公卿である参議が多数任命され、莫大な経済奉仕を行い、藤原道長の栄華を支えたという。

式部で、「五位など物の数ではない」と日記に書いているそう。父・為時は五十歳ごろになってようやく五位に昇ったというのに。

中央での昇進が当面望めない中・下

前述の山口先生によると、異動時期に老いて頭の白い貴族が女房(高級貴族に仕える女性スタッフ)に任官の助けを頼んでいる姿を、清少納言が『枕草子』に嘲笑して書いている。しかし、嘲

笑されようが幸いに受領に任官すると目上の人まで寄つてきてベンチャラを言う。今まで見たこともない立派な家財道具や着物が湧き出るように集まってくる。と、これも枕草子にあるそう。

式部は『源氏物語』の須磨・明石帖で播磨国前司(元国司)だった明石入道の豪勢な暮らしぶりを描いている。豪勢な暮らしの源泉は都での頭職を捨て播磨国守となり、蓄財に励んだ成果だった。権少掾だった父・為時の見聞に基づき記述と考えられている。

播磨国守となり貯めこんだ私財を上皇らにせつせと貢いでさらなる出世を果たす貴族もいた。平安末期になるが、平氏の忠盛・清盛の父子二代にわたって播磨国守に就いたのをみてもそのうまみが理解できよう。

国守、国介ぐらいまでは余得があつたろうが、為時のような中間管理職にはおこぼれが多少あつたぐらいか。「権少掾為時さん、ほんの少々でも貯めとき」。駄洒落でオチとする。

佐野允彦(さのまさひこ)：1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで

小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。



歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
歴史探訪

## その16

大河ドラマ  
「光る君へ」に  
寄せて(続々)

摂関時代の播磨の受領は  
摂関家にゴマすり奉仕

仕を挙げている。他国ではこの時期、苛斂誅求の受領に対する上訴事件が相次いでいる。

歴史の教科書にも載るほど有名なのは尾張国の郡司・百姓らの訴え(988年)で、大河ドラマでもこの訴えが朝廷の会議で取り上げられていた。播磨国守に対しこのような上訴事件が記録されていないのは、重い負担にも耐えるだけの生産力があつたから、というのが「小野市史」の見解だ。

同市史は「播磨の富裕さの背景には、材木・瓦といった特産品の存在が関係していたと考えられる」としている。私には加えて有名な鉄と塩の生産、さらには紙の生産もあつたと推察するが、またまた紙幅が尽きた。前述の「類聚符宣抄」には諸国からの貢納品として播磨国は「上紙一千張」などが課せられている(延喜14年11914年)。紙の生産の話は来月に稿を改めたい。

ともあれ播磨の受領の話はほぼ書き終えた。これで原稿料も受領できる！

佐野允彦(さの まさひこ)：1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。



小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

6月の本欄では、大河ドラマ「光る君へ」の主人公、紫式部の父である藤原為時が播磨権少掾として播磨国庁で勤務した縁から、上司である播磨国守(受領)の姿を若干紹介した。しかし、紙幅の都合で十分書き切れなかった。今月はもう少し播磨の受領の実像に迫りたい。

為時が播磨権少掾に任命されたのは安和元(968)年11月だったというのは5月号で述べた。この人事を通達したのは、権大納言藤原伊尹で、「ただちに任務に就け」(大意)と命じている。ちなみに伊尹は藤原道長の父・兼家の兄で、のち摂関・太政大臣にまで出世した。彼は歌人でもあつたから、文才のあつた為時は縁を結ぶこともできたはずだが、コネづくり、人脈づくりの才覚には欠けていたようだ。ドラマでも謹厳実直なイメージを感じる。

この人事は「類聚符宣抄」に記録さ



▲東播磨の窯跡出土の瓦(左側)と京都の遺跡出土の瓦(右側)。文様や傷跡が同じで播磨産の瓦が用いられたことが分かる=県立考古博物館提供

京都 法勝寺の復元イラスト(CG・梅村重之さん「3D京都」)。造営には播磨産の瓦や資材が使われた。▼



務だから為時と席を並べて播磨国庁で勤務してはいない。

『小野市史第一巻』によれば、摂関時代、播磨が負担した内裏・大内裏の造営・修理は数多い。960年に焼失

れている(5月紹介)のだが、これからわずか3カ月ほど後の安和2年2月の記事で「大外記兼播磨権少掾」という肩書の官人を見つけた。ただこれは兼

した内裏の再建時には二つの殿舎を造営している。ほかに「カ所を造営した国は近江と美濃だけだった。」

次に権力者への奉仕の代表例として1017年、藤原道長が京都・石清水八幡宮に参詣した際、当時の播磨守・藤原広業は豪華な渡し船4艘を献上している。他の貴族が「身分不相応な贅沢極まりなし」と驚き、批判するほどだった。この広業は藤原北家の傍流の出身で、漢文学者であつたというから為時の境遇とよく似ている。違いは摂関家への奉仕を欠かさなかつたということだ。

これより10年ほど前の1005年のことだが、播磨介(次官)の藤原陳政は私財をもって内裏の2殿舎を造営し、重任を申請している。

この財力の源泉として播磨国からのおびただしい収奪があつたはず。『兵庫県の歴史』(山川出版社)は、「摂関政治の経済的基盤となつたのが受領の活動である」とし、活動の柱として任国での強引な収奪と摂関家への経済奉

歴史ジャーナリスト

佐野允彦の

はりま・おの

## 歴史探訪

その17

大河ドラマ  
「光る君へ」に  
寄せて(続々々)受領の娘と地方の紙が  
王朝文学を花開かせた

「五位の受領の娘ぐらいでない」と難しし」

NHKの大河ドラマ「光る君へ」(第13回⇨990年ごろの話)で、娘の紫式部が「どこかのお屋敷で働きたい」と申し出たのに対し、父である藤原為時(役⇨岸谷五朗)が渋い表情で答えたせりふだ。為時は当時、まだ六位ぐらいの下流貴族で、しかも無官。つまり無職で、そんな親の娘がしかるべき貴族屋敷での女房仕めは無理だろうと吐露したのだ。

「女房」のことは前号で高級貴族に仕えた女性スタッフと説明したが、具体的には執事、秘書、家庭教師などの役割を勤めた女性たち。それなりの家柄に加え、かなりの教養や才覚が必要だった。キャリアウーマンを目指す女子には人気の職種で、式部の女房仕めがかなうのは為時が越前の受領を終えた後(1005年、36歳ごろ)。

式部が仕えたのは中宮彰子(藤原道長の娘)だが、宮中入りに従った女房は42人だった。国文学者、山口博さんは、当時の女房数を約300人と推



写真上は、紫式部の絵姿。手元の紙は杉原紙か?  
写真右は、杉原紙の冬の風物詩、楮の川ざらし(多可町那珂ふれあい館提供)



計している(『王朝貴族物語』)。

女房は高級貴族の私設スタッフだが、平安期には朝廷・後宮に仕える「女官」(国家公務員)も千人以上いたとされる。公私ともに多くの女性が社会進出

していたのだ。小野市は女性市議の多さや自治会役員の女性登用など女性参画の先駆とみられているが、摂関政治の時代は日本史上最初の女性参画の時代だったと言えるかもしれない。

さて、前月の本欄で播磨国の紙生産に言及した。播磨は奈良時代から紙の産地で、平安時代には諸国の中でも紙の主産地に数えられ、紙の貢納国に位置付けられていた。その「播磨紙」の主産地は北播磨・多可郡の杉原紙だったのではと推察する。

以下しばらく湯山賢一さん(元奈良国立博物館長、古文書学者)の論文「日本の和紙文化における杉原紙」(多可町教委「杉原紙総合調査報告書」所収)に拠る。杉原紙の最古の史料は、関白藤原忠実の日記「殿暦」の永久4(1116)年7月の記事。

「相(杉)原庄証紙百貼」との記述がある。12世紀初頭には杉原紙が摂関家の荘園、相原庄から上納されていたという。湯山さんは相原庄が摂関家の荘園として立庄されたのは頼通の時代

としている。私は正式な立庄は頼通の時期としても、父・道長のころから何らかのつながりがあり、杉原紙が摂関家に上納されていたのではと推察する。

山口さんも「道長が自ら上等な美しい紙や筆・墨・硯を用意し、女房たちは紙を選び、物語をつくっていた」と説く。この紙の中に杉原紙も含まれていた可能性はあるだろう。清少納言の「枕草子」成立の事情として、彼女が仕えていた中宮定子に兄の内大臣、藤原伊周が双紙(冊子)を奉り、それが彼女に下賜された。たくさんあった紙を書ききろうと枕草子を書いたという(折口信夫「枕草子解説」⇨『国文学篇4』所収)。

とすると、道長や伊周ら上流貴族のもとに上納された地方の紙が潤沢に式部や少納言らに提供され、彼女たちが競って物語などを書いた。ここに世界に冠たる王朝文学が花開くのである。式部や少納言が杉原紙に書き綴ったとしたならまことに興味深い。神業(紙業)だ!



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

# 歴史探訪

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の

はりま・おの

その18

大河ドラマ  
「光る君へ」に  
寄せて  
(続々々々)

## 「源氏」は杉原紙に書かれた!? その証拠を北播あげて探そう

初稿ゲラを作成している。よって私が神戸新聞をネタにコラムを書いたわけではないことはご理解いただけよう。

誤解が解けると、うれしいのは源氏

「えっ何これ、偶然、盗作？」神戸新聞の7月13日付北播版のトップ記事を見て思わず声を上げた。「源氏物語は杉原紙に書かれた？」の見出しで、元多可町長の戸田善規さんが著作「紫式部が愛した紙」を7月末に発刊するという骨子の記事だ。

実は私はこの『広報おの』8月号(公式発行日は8月1日)に式部は源氏物語を杉原紙に書いたのではないかという同様の趣旨のコラムを出稿していた。私のコラム執筆の経緯を知らない人には、私が神戸新聞の記事に触発され、それをもとにコラムを書いているのではと誤解されると思ったのだ。

私が8月号のコラムの構想を得たのは3月段階。その時点で那珂ふれあい館(多可町)に杉原紙の資料と写真提供をお願いしている。他の参考文献にも目を通し、原稿を仕上げたのは6月下旬。7月5日には市民サービス課が



▶写真右は、広報8月号の拙文コラムの紙面(一部)。神戸新聞の記事(本文冒頭)より後発だが、この記事にヒントを得て広報のコラムを書いたのではないことは本文中に記した。  
▲写真上は、「杉原紙発祥之地」の石碑(那珂ふれあい館提供)。中・近世に全国ブランドとなった杉原紙は北播全域の宝だ。地域おこしに活かしたい。

が杉原紙で書かれたのではないかという洞察を地元、多可町の方、しかも元町長さんもされていて、立派な著作に仕上げられたことだ。同士を得た喜びだ。実は私は記者現役時代、多可町の

発足時から取材をしていて、初代町長の戸田さんとはさまざま取材を通じて親しくしていただいた。その時から感じていたのは、戸田さんはただの地方政治家でなく、文化人的な方だという認識だった。その戸田さんの著作出版は率直にうれしい。

余談が過ぎた。紙の話に戻す。大河ドラマ「光る君へ」では7月ぐらいの放送で、式部のライバル、清少納言が豊富に下賜された紙に随筆を書き、「枕草紙」として宮中で評判なのを自慢しつつ、式部に「あなたも物語でもお書きになったら」と勧める場面があった。

さて、式部が杉原紙に出会う以前、式部のお気に入りには越前紙だったので、と推察する。父である藤原為時(たけとき)が越前国守に赴任(996年)、式部も帯同する。平安時代、越前は良質な和紙の主産地だった。あるとき為時の和紙工房視察に同道し、紙すきの様子を見つつ、越前紙の良さに感服する。

工房の長が土産代わりに紙一束を為時に渡そうとするが、為時は「そ

う気遣いは無用」と受け取らない。為時の実直な人柄が知られる場面だった。越前紙については朽見行雄「日本史を支えてきた和紙の話」(草思社、2023年刊)という良書がある。式部と越前紙の出合いに一章を割り、「式部は源氏を越前紙に書いた」と言いたくならない様子がうかがえるのだが、確証がないため明言は控えている。だが、大河8月18日放送分では、藤原道長が式部に新しい物語(源氏)を書かせるために大量に下賜したのは越前紙としていた。

源氏が杉原紙に書かれたという確証もいまのところないのだが、私は何としても裏付ける史料を多可町、いや北播の総力を挙げて見つけ出してほしいと願う。源氏を生んだ紙の里が多可・杉原とわかれば仏の里、小野・浄土寺との連携コースも設定できよう。何しろ、紙(神)も仏もそろっているのだから。



佐野允彦(さの まさひこ)……1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
**歴史探訪**

## その19

大河ドラマ  
「光る君へ」に  
寄せて  
(陰陽師編)

## 安倍晴明のライバル、蘆屋道満は、 播磨出身の有力な陰陽師だった

作成、異常事象の予告、天皇らの吉兆の占いなどに携わった。技術系の国家公務員だ。

「本来」と記したのは、役人である



▶写真右は、蘆屋道満と安倍晴明を描いた浮世絵(「北斎漫画」より)。  
▲写真上は、今夏も地元の人たちによってハメ塚の祭りが行われた(小野市中島町、市民サービス課撮影)

NHKの大河ドラマ「光る君へ」にあまりやかり、本コラムで紫式部と播磨の縁を連続4回題材とした。高貴な貴族女性の「女房」だった式部らが王朝文学の花を咲かせたと紹介した。

だが、皆さん、ドラマを思い起こしていただきたい。脇役ながらほぼ毎回登場し、強い存在感を示していたのが陰陽師の筆頭、安倍晴明。演じたのはユースケ・サンタマリアで、適役だったと思う。雨乞いや呪詛を依頼するなど関係が深かった藤原道長が最期を見舞う(8月25日放送)が、この回は視聴率が上がったとか。

ここ20年ばかり陰陽師ブームが続き、陰陽師の説明など今更不要だろうが、ごく簡潔に説明する。テレビや映画では超能力を持った魔術師のように描かれているが、晴明ら陰陽師は本来、朝廷の役所の一つ、陰陽寮などに置かれた職員で、天文の観測をもとに暦の

の道満を探る。

道満と言えば晴明との「術比べ」が有名だ。斎藤英喜「陰陽師たちの日本史」(2014年)に拠ると、『宇治拾遺物語』巻十四には、道満法師が道長に呪詛を仕掛けたのを晴明が見破り、道長を助けた。道満は呪詛を暴かれ、故郷の播磨に追放される。「法師」とされているのは、彼が正規の陰陽師でなく、僧侶身分で陰陽師の仕事(呪術や占術など)を請け負っているからだ。

正規の陰陽師に比べると在野の存在、陰の存在だが、都に限らず諸国にも大勢いた。中でも播磨が法師陰陽師の勢力圏だったという。そこに「追放された」のが処罰になるのかどうか私には疑問に思える。

『はりま陰陽師紀行』(播磨学研究所編、2006年)に拠ると、播磨各地に道満屋敷があった(伝承)という。有名なのは江戸時代の『播磨鑑』の記事で、「道満屋敷 岸村に道満屋敷といふあり。今は民居となれる」とある。加古川市西神吉町岸で、今も道満屋敷跡

と伝わる場所がある。

『紀行』には、江戸時代中期、加西市北条町の「高室芝居」の役者たちが陰陽道の総帥、土御門家から陰陽師免許を得ていたとも記述されている。芝居(播州歌舞伎)のほか万才職も務めて諸国を巡業していたという。

私の手持ちの本「日本の聖と賤」近世篇(1986年)で著者の一人、沖浦和光は「播州の北条にもいくつか役者村があった。もともとは陰陽師系の集落だった(要約)と記している。

市役所の北、中島町にはハメ塚がある。ハメ(マムシ)の害に悩んでいた村人たちが陰陽師の安倍晴明に頼み、呪法でハメを鎮めたとの伝承がある。室町時代のこととされているが、晴明が播磨国司になったことを反映している伝承なのか、謎である。だが、今年も8月4日、地元の人たちによってハメ塚の祭りが行われた。晴明、道満の時代から約千年たつが、播磨の陰陽師(伝説)はなお生き続けている。



佐野允彦(さの まさひこ)：1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

歴史探訪  
佐野允彦の  
はりま・おの

その20

大河ドラマ「光る君へ」に  
寄せて  
(仏教・信仰編)

末法思想のあかし、王塚経塚は  
王塚古墳の墳丘上に営まれた

私が経塚遺構を実見したのは、  
2000年ごろ、京都・宇治支局勤務  
の時。宇治市教委による白川金色院跡  
の発掘調査の成果発表だった。遺物が



▲墳丘に経塚が営まれた王塚古墳  
(好古館提供)

王塚古墳・経塚から出土した経筒  
(後ろ左)などの遺物(好古館提供)▶

限らず中下級の貴族、僧侶、地方の武  
士、さらには百姓までもが埋経を行っ  
た。道長存命期とその後数十年(11、  
12世紀)は日本史上、埋経の隆盛期だ  
った。

地方にも広がった。本稿の主題であ  
る小野・王塚古墳の経塚もその一例だ。  
戦後間もない1952年、県教委と京  
大が古墳の発掘調査をした時に見つか  
った。墳頂近くに小石室がつくられ、中  
に陶製の経筒、須恵器甕などが収めら  
れていた。上層者の経筒は金銅製が多  
いのだが、これは陶製なので身分差が  
うかがえる。好古館の学芸員・山本原  
也さんは王子あたりの村の有力者(農  
民層)のものと推察。須恵器甕の編年  
から12世紀後期と見ている。

すぐ近くの敷地大塚古墳にも経塚  
(敷地宮林経塚)があり、銅製の経筒  
(東京国立博物館蔵)が見つかっている。  
小野市内では唯一の金属製経筒だ。12  
世紀中ごろのものと想定される。王塚  
の経塚に数十年？先行し、格上とみら  
れる。二つの経塚で注目されるのは、古

墳の上に造られていること。経塚は金  
峯山寺のような霊山視される山や神  
社仏閣の境内に営まれる例が多いが、  
古墳に築造された経塚も少なくない。  
なぜ墳丘に築いたのだろうか。山本

さんは敷地、王塚の一例では「西方への  
眺望が優れており、経塚造営の適地と  
して選択された」と洞察している(令  
和6年度特別展図録)。少し舌足らず  
なので私の推測を加えると、加古川の  
西側、青野ヶ原丘陵の向こうに夕日が  
沈むのを眺望できた、夕日が沈む場所  
を西方浄土と思念した。夕日が山越  
えで加古川東岸の段丘上の古墳に差  
し掛かる。山越えでの仏出現を思い浮  
かばせる。

推察を積み重ねたが、市民の皆さん、  
11月10日まで好古館で開催中の特別  
展「大部地区のあけぼの」に王塚経塚  
の出土品が展示されているので、見学  
してください。11月は文化財保護強  
月間。とりあえず経塚の話はこれで一  
巻の終わり、今日(経)でしまい。



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、  
富山県生まれ。同志社大学(文化史学専  
攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間  
勤務。2010年から2023年3月まで  
小野市学術政策員(広報ア  
ドバイザー)を務める。現在、  
市文化財保護委員会委員。

大河ドラマ「光る君へ」で藤原道長  
が寛弘4(1007)年、「御獄詣」で  
大和・吉野の金峯山寺に参り、お経を  
山中に埋納する場面が登場した。悪  
天候についての参拜で、政敵の藤原伊  
周が武者を引き連れ、道長暗殺を図  
るシーンもあり、見応えがあった。

ドラマでは、盛り土し塚を築く(経  
塚と呼ぶ)場面まではなかった。この経  
塚を築く行為、平安後期に流行った  
「末法思想」の現れだ。末法思想とは、  
釈迦の入滅後、時代が下るにつれ仏法  
が衰え、世が乱れるという思想だ。日  
本では永承7(1057)年が末法入  
りの年とされ、末法に備え後世まで仏  
典を伝えるため、経塚が築かれた。

実は冒頭で紹介した道長の経塚が  
現存する最古の事例なのだ。道長が自  
ら書写した法華経などの経典を収め  
た経筒は金色に輝く豪華な円筒形の  
金属容器で、国宝に指定されている。

和鏡、青白磁の合子、小壺など優品が  
多く、女性にふさわしい品物だったこ  
とから、同寺院の創建者、藤原寛子  
(平等院の創建者頼通の娘、つまり道  
長の孫)ゆかりとされた。上級貴族に

歴史ジャーナリスト  
佐野允彦の  
はりま・おの  
歴史探訪

その21

市制70周年  
に寄せて

## 「小野」の地名由来、謎多し おのおの方、解明に挑戦を

で、本稿では角川文庫版（昭和43年刊）の初版に拠って柳田の見解を紹介する。まず「小野は全日本に最も広く分布している地名だ」と指摘。野（ノ）と



▲元禄11(1698)年作成の「一柳土佐守知行所絵図」にある「小野」(好古館提供)

◀小野のルーツとなった小野藩陣屋跡付近(西本町)



「えっ、これは何なのか?」。10月18日付朝日新聞の全面広告、「だからおのなのか」を見て仰天した。「おののか」さんという女優をモデルに起用し、コスモス畑を背景にした大写真を一頁全面にあしらった広告だ。観光PRかと思ったが、小野市の地域活性化事業の一環だそう。女優の「おの」さんは芸名で、当市とはまったく無縁だそう。そこで気になったのは「小野」の地名由来だ。なんで小野なのか? 「今さら」と思う向きもありだろうが、これが意外と分かっていないのだ。12月1日に市制70周年を迎えるのを機に考察したい。

地名の由来となると、播州・福崎出身の民俗学者、柳田国男の研究を抜きに語ることはできない。そもそも柳田こそ地名研究の先駆者で、その成果が名著『地名の研究』だ。主に大正時代から昭和初期の研究をまとめたもの

「小」を頭に付けて「小野」と呼ぶ地名が生まれたとする。山裾の原野を開拓し、田畑とし、かつ居住したことで「小野」が成立した。これが小野の地名由来の定説となっている。

特別に由緒ある地名ではなく、そこら中に「小野」があった。有名なのは滋賀県大津市の「小野」で、遣隋使・小野妹子、歌人の小野小町の出身地と伝える。県内に限っても出石郡、城崎郡などにも小野があった。一説には小野も大野も一緒に「オノ」とオノは通底する) かならずしも「小さい野」とは限らないという。

加古川の右岸を青野ヶ原と呼び、左岸を小野ヶ原(小野の原)と呼び、これが「小野」になったとする見解もある。傾斜地、裾野であれば広大な「小野大部段丘」の随所が「小野」と呼ばれていいはず。だとすると、結構広い「野」で「大野」としてもおかしくなかった。なぜ江戸時代の門前村の小野だけが今日まで残ったのかは謎だ。

本稿執筆に際し市立図書館に文献

調査をお願いしたのだが(十数冊の参考文献を紹介していただいた。ここでお礼の言葉を記します)、それによると文明3(1471)年の年貢勘定状の「小野井口方」が最古の記録のようだ。次なる記録とされるのは小野藩関係の史料で、「承応2(1653)年、藩主の居所(陣屋)を敷地村から門前村の小野に移した」という記録だ。

小野に陣屋を置き、陣屋町を形成することで地域一帯が小野町と呼ばれ、明治時代以降の小野村を経て大正4年に小野町が発足した。これを核にして昭和29(1954)年、小野市が誕生する。陣屋が敷地村のままだったら「敷地藩」となり、敷地町↓敷地市となっていたかもしれないのだ。私的な思いつきだが、一般名詞のような小野より歴史的に由緒のある大部荘から採って「大部荘市」ないし「播州大部市」などがよかったと考える。

おのおの方も市制70周年を機に小野の地名について考えられてはいかが。



佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで

小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

歴史探訪  
佐野允彦の  
はりま・おの

その22

「青」の原が「小野」のルーツか!?  
—地名由来の続編、なお謎は残る

市民の皆さま、新年おめでとうございます。今年は巳年。前月は小野市制70周年を機に「小野」の地名由来を考察した。今月も蛇のようにしつこく考察を続けたい。

前号で加古川の右岸を青野ヶ原と呼び、左岸を小野ヶ原(小野の原)と呼び、これが「小野」になったとする見解を紹介した。だが確かな論拠(史料)はないようだ。私も論拠はないが、「もともと加古川の流域平野(小野盆地)全域が「青の原」と呼ばれていた」と推察する。

「神聖な島」とみなされるようになったと指摘する(「青と白の幻想」三一書房・1979年刊)。

谷川は沖繩の「青の島」論を本州に



▲写真中央のおの桜つづみ回廊の奥、横につらなる緑の山並みが青野ヶ原台地(=おの桜つづみ回廊上空からドローン撮影、市民サービス課提供)  
▼「青野ヶ原」変遷の概念図(私案)。市観光協会発行の「おの恋ごはん」所収の地図をもとに作成



古代、東は北摂山地、西は青野原台地に囲まれた小野盆地は緑(青)あふれる原野で「青野」と呼ばれていたと推察する。民俗学者、谷川健一氏によると、沖繩には「青の島」と呼ばれた島があり、そこはかつて死者を葬った島だったという。ただし、「暗黒の地獄ではなく、明るい『冥府』である」と理解し、

も拡大する。沿岸の随所にある「大島」の多くはもと遺体を埋蔵した島で、「青の島(青島)」だったと敷衍する。青島は大島によく転訛するのだ。アオー↓アフ↑オウに変わるといふ。

また青と墓には相似性があると説く。岐阜県大垣市に「青墓」という地名があり、後白河院に今様を教えた遊女がいて「青墓の遊女」で史上有名な塚に「青墓」に転訛したとされる。伊賀にもある青墓の由来について「粟生某といふ者の墓、(中略)粟生は青の訛にてこの塚の名なるべし」という解釈があることに留意してほしい(以上は谷川「青銅の神の足跡」集英社・1979年刊に拠る。補説を後述)。

つまり「青(野)」には聖域のようなイメージがあったことを述べたいのだ。もう一つ留意してほしいのは、「飯豊の青皇女」という皇族の存在だ。雄略天皇が政権争いで暗殺した弟の王子2人(億計・弘計2王子)を庇護した女性。一時王権を握り事実上、日本史最初の女帝とされる人物だ。逃亡した2王子は最終的には志染の岩屋(三木市)に身を隠すが、途中の逃亡先と伝える若狭・青の郷と深い縁がある。「飯豊青皇女」のほか青海皇女、忍海郎女王

など多くの名前を持つ。谷川の前掲書によると、「飯豊と青とは重語」で、「忍海の忍は押であり、大であるから(中略)、忍海は大海であり、前は青海ではなかったか」と説く。大海、青海ともオウミ、アフミと読む。

2王子が「木」で身を寄せた先は忍海部造細目だった。以上も谷川説によらず、2王子はやみくもに逃げ回ったわけではなく、青皇女ゆかりの地を見定めて逃亡したのだろう(これは私見)。

逃亡先近くの小野に「青野ヶ原」があり、「粟生」があるのは偶然ではなく、2王子の天皇擁立に協力した小野の諸豪族が「青皇女」を意識したからではなからうか(これも私見)。「飯豊」は単に「飯が豊か」の意味でなく、「殺類(粟を含む)」の豊作の願いを込めた名前だ。「粟生」という地名に遺存したと考えられないだろうか。



年末に青息吐息でここまで書き継いだ。体調不良などにより文章が錯綜したが、ご寛恕のほど。

佐野允彦(さの まさひこ)：1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。



歴史ジャーナリスト 佐野允彦の はりま・おの 歴史探訪

その24

身近な歴史に興味、関心を 連載終了に際してのご挨拶

史を専攻し、記者生活でも文化財報道に力を入れてきたからだ。

2010年9月、「おの歴史散歩」のタイトルで本欄連載はスタートした。



▲コラムがきっかけで開かれた講演会で熱弁する筆者 (2021年10月、コミセンおの)

したいと思った。

連載は14年7カ月に及んだ。途中、タイトルを変えたり、体裁、紙幅を変えたりしてきたが、本号で連載は通算175回に達した。そもそも広報アドバイザー自体3〜5年で辞めるつもりだったから、10年以上、百回以上も続けるとは思いませんでした。続けてこられたのはひとえに蓬萊市長の励まし(脅し?)による。すい臓がんになり「連載をやめたい」と申し出たときも「できる限りやりなはれ」と叱咤激励された。百回ごろから「本にしよう」とも言うていただいた。実際、一度予算要求したのが、事前審査で却下された。新情報では、来年度書籍化の予算がついたようです。

それはともかく、近畿市町村広報紙コンクールでも、「市の広報誌にしてはユニークな紙面だ。内容も興味深い」と講評されたのはうれしい思い出だ。題材で思い出に残るのは、「柳満喜子さんの妹が我が郷里、富山県高岡市の大実業家、筏井家に嫁いでいた証拠

を好古館前の磐代神社の玉垣に見つけたことだ。これは高岡の地方史研究者らには未知の資料で、「大発見や」と一人小躍りしたものだ。

好きなように書かせていただいたが、幸いなことに「市文化財保存活用計画書」(23年度策定)にも紹介していただき、いざさかでも歴史・文化財の啓発に役に立たたかとうれしかった。

私は歴史を学ぶ意義は「温故知新」に尽きると思っている。「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る」ということだ(本欄右肩に掲げたカット)。今年、昭和百年、戦後80年の節目の年だ。皆さんもまず足元の歴史から見直していただきたい。それが「未来に誇れる小野市」を築いていく契機につながる。この言葉を別れの言葉、贈る言葉としたい。

長らくのご愛読、ありがとうございました。末尾ながら資料提供や文献探索にご協力いただいた好古館と図書館に厚く感謝いたします。

佐野允彦(さの まさひこ) 1947年、富山県生まれ。同志社大学(文化史学専攻)卒業。朝日新聞社に記者として40年間勤務。2010年から2023年3月まで小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。



小野市学術政策員(広報アドバイザー)を務める。現在、市文化財保護委員会委員。

本コラム第1回の紙面 (2010年9月発行の広報おのより)▼



前月号の本欄で体調不良により本連載を3月で終了するとお伝えした。終了に当たり、連載の思い出と15年近くご愛読いただいた皆様にお礼と贈る言葉を記したい。連載の発端は蓬萊市長の言葉だった。朝日新聞退職後の2010年春、市長から「市の広報アドバイザーをお願いしたい」と声を掛けていただいた。朝日記者としての最晩年、お世話になった北播に何らかの形で恩返しをしたいと思っていたので、喜んでお引き受けした。その際、「記者経験があるのだから、佐野さんが自分で書く欄を設けては」と勧めていただいた。私自身、40年の記者経験を活かして自分らしい紙面を作りたいと思っていたので、願ったりかなったりだった。その紙面、いろいろ考えたが、小野地域の歴史や文化財を題材にした歴史コラムが最適ではと思った。大学で日本

単に先学の本などを孫引きするだけでなく、記者経験を活かし現場を踏む、かつ時節にタイムリーな題材を考えた。恐れ多くも大作家、司馬遼太郎氏の「街道をゆく」のような文章を目指